

## リトミック音楽教育の実践

—身体即興表現を中心に—

### The Practice of Eurhythmics Music Education : With a Focus on Improvised Physical Expression

大山伸子  
Nobuko Oyama

#### 要約

リトミック音楽教育を創案したエミール・ジャック・ダルクローズ (Emil Jaques=Dalcroze) は、(1) MOVEMENT (2) SOLFEGE (3) IMPROVISASION をリトミック教育の根幹とし体系化した<sup>(註1)</sup>。MOVEMENT とは、音楽リズムの基礎的な要素を身体を通して学習すること、SOLFEGE は音楽の基礎的な聴く・読む・書くという学習を身体を通して理解し習得することである。IMPROVISASION についてダルクローズは、リトミック指導方法として、ピアノ即興法を主として示しているが、筆者は“曲のイメージを即興的に身体で表現する”という Improvisation の学習としてアプローチし、実践的な研究を行っている。

「What is the first instrument that must be trained in music ? The Human Body」

(音楽において学習しなければならない最初の楽器はなんですか？ それは人間の体) とダルクローズが述べているように<sup>(註2)</sup>、「人間の身体は“楽器”」は、リトミック教育の特徴が端的に表れている。

本論文は、リトミック実践を身体即興表現からアプローチし、短期大学保育科における授業を通して実践例を書きまとめ、さらに、保育園におけるリトミック教育の表現活動の実際を紹介し、リトミックの「身体即興表現」の教育的意義について考察する。

#### I. リトミック音楽教育とは

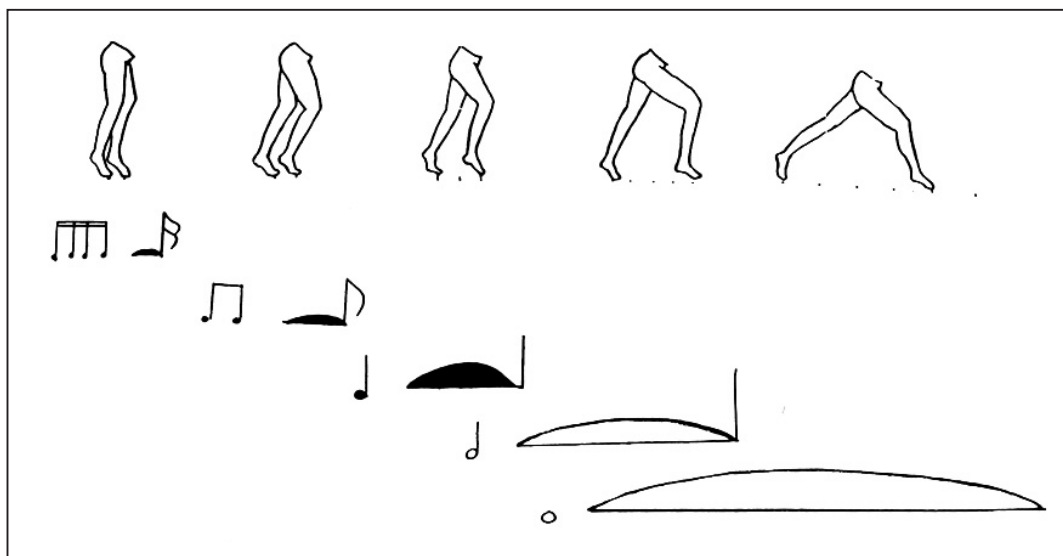
リトミック (Eurhythmics) とは、リズム運動を通して身体で音楽を感受させ、豊かな音楽性を育てようとする音楽教育であり、スイスの作曲家、音楽教育家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques=Dalcroze 1865-1950) によって創案されたメソッドである。

Eurhythmics の語源は、ギリシャ語の Eurhythmos に由来し、「優美な動き」「良い流れのリズム」と訳される。人間には、自然な生命のリズム感覚があり、ダルクローズは、歩く、走る、ジャンプする、スキップする、揺れる等の身体運動を音楽の要素に置き換えた。<sup>(註3)</sup>

例えば、歩く (♩ = 4分音符)、ゆっくり歩く (♩ = 2分音符)、歩幅を大きくゆっくり歩く (♩ = 全音符)、走る (♩ = 8分音符)、速く走る (♩ = 16分音符)、スキップ (♩ = 付点8分音符 + 16分音符) 等の人間の身体運動の営みは音楽である、という解釈を基礎に置いている。

また、Time (時間)、Space (空間)、Energy (動力) との音楽的関係性を理論付けている。つまり、リズムの長短はステップの歩幅を表し、リズムの長短はエネルギーの使い方と相関関係にある、という関係性である。

下記の【図1】について、左端の16分音符は1拍を4つに刻む細かいリズムであり、ステップの歩幅は小さく、動力も少ない。しかし、右端の全音符は4拍の長いリズムであり、ステップの歩幅は大きく、動力も大きく使う。音楽の Time (時間)、Space (空間)、Energy (動力) は、密接不可分な相関関係にあり、双方向性を持つものである事をダルクローズは見出した。



【図1】 Time (時間)、Space (空間)、Energy (動力) の相関関係：筆者作成 (註4)

ダルクローズはリトミックの学習課題をリズム運動 (Movement)、ソルフェージュ (Solfege)、即興演奏 (Improvisation) として体系付け、Eurhythmicsと名称した。(註5)

### 1. エミール・ジャック＝ダルクローズの略歴とリトミック音楽教育の確立

リトミック (Eurhythmics) を創案したエミール・ジャック＝ダルクローズ (Emil Jaques=Dalcroze) は、1865年7月6日、ウィーンのアム・ホッフで生まれた (本名：エミール・アンリ)。1871年 (6歳) からピアノのレッスンを受けるが (註6)、ダルクローズ家は家族全員が音楽演奏を嗜んでおり、特に、ピアノ教師であった母親ジュリー・ジョナサン (ペスタロッチの教育理念に傾倒) の影響は大きかった。また、地元でヨハン・シュトラウスの指揮による日曜日ごとに開催されるオーケストラ・コンサートは、彼の音楽的才能の形成に深い影響を与えた。

1875年 (10歳)、ジャック家は、時計商社勤務だった父親の仕事の関係でスイスのジュネーヴに移り住む。

1877年 (12歳) にコレージュ (中学校) とジュネーヴの音楽学校へ同時入学、1881年 (16歳) にキムナジウム (高等学校) に入学した。この頃から簡単なシャンソンを書き始める。

1883年 (18歳) に高等学校を主席で卒業し、ジュネーヴ大学に登録する。

1884年 (19歳)、音楽と芸術学、演劇を学ぶためにパリに出発し、ガブリエル・フォーレ (註7) に作曲法を学ぶ。パリの地で若い時期に演劇を学んだことは、後にリトミックが創案される重要な要素になったと推測できる。

1886年 (21歳)、ダルクローズは、作曲家アドレーが主催するヌーヴォテ劇場の第二指揮者として契約するためにアルジェに発つが、1シーズンのアルジェ滞在は、ダルクローズがリズムの意味を知った決定的なものとなる。

また、シャンソンの楽譜出版のためにペンネームをエミール・ジャック＝ダルクローズとし以後自作曲にサインするが、生涯でオペラ、室内楽、歌曲、ピアノ曲など約1000曲を書き遺している。室内楽「王様の婚礼」は、ダルクローズの特徴がよく表れパーカッションが生かされたコミカルな作品で、作曲家としての功績も数多く遺しているが、日本では彼の作品に触れる

機会は中々ないのも事実である。

1887年（22歳）にウィーンに出発。音楽学校で2年間ピアノ、和声法、対位法、作曲法をアントン・ブルックナー<sup>(註8)</sup>に師事する。

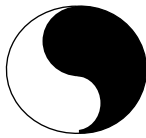
1889年（24歳）にパリに戻り、マチス・リュシに「リズムと表現の法則」について学び、そのことがダルクローズの提案した「アナクルーシス」というリトミックの重要な要素に結びついていった。この頃からリトミックの探求の道が始まる。リトミック創案の象徴的な文章が次の内容であるが、リトミックの形成はまだ緒についたばかりであった。

生徒を観察していて、彼は突然、探しているものを発見する。彼は生徒たちを見る。音に合わせ、クレッシェンドに従い、アクセントを区切って、元気のよい足が地面を打っている。頭が揺れている。生徒たちは手足を動くにまかせている。よく見てみよう。体を揺すり、頭を上下に揺すり、左右に振り、拍子をとる……彼らは音楽にひたり切っている。まさにそれだけだ。彼らは感じている。感応している。彼らは楽器そのものだ。そう、彼らは楽器なのだ。

ダルクローズは目的に迫り、それを見抜き、そして到達する。彼は発見したのだ！ 身体は第1番目の楽器、活発な精神の動きに順応する協力者なのだ。そして、芸術家はそうした精神と身体的一致から出発するのだ。

しかし、全ては、まだ明確に把握されていないでいる。1889年に、彼自身、それが真実であつて欲しいと思っている事柄について述べている。<sup>(註9、10)</sup>

※この文章はダルクローズの弟子、クレル＝リズ・デュトワ＝カルリエである。



※左図は、精神と身体の調和について

リトミック教育を表現したマーク。

後述する「トモエ学園」の子どもたち

の心身両面の発達と調和を願う校章でもある。

1892年（27歳）、ジュネーヴ音楽学校の和声理論教授として着任し、学生たちを指導していて、「音楽学習を技巧的ではなく、音楽の生命を感じる心を持たせる方法はないものか」「劇、音楽、表現、感覚、演奏、それらすべてを総合的にまとめる学習はないものか」と、音楽教育の在り方を模索している。

1901年（36歳）、聴覚能力を発達させる考えが浮かぶ。すなわち、リトミックの方法の基礎が形成される。つまり、音楽のリズムを聴き分け、歩く、走る、スキップするなど運動機能に訴える音楽がリトミックの基礎であることを関連付ける。

1902年（37歳）、ローザンヌ音楽学校でリトミックの思想を発表し、ジュネーヴ音楽学校でリトミック試みのため特別クラスを開いた。

1904年（39歳）、ダルクローズは《体育の基本的要素が、音楽のリズムに基礎を置いている》と宣言する。

1905年（40歳）には、ジュネーヴのサン＝ピエール劇場でリズム体操の授業を開き、スイス音楽協会、音楽教育会議に学校における音楽教育改革について講演する。

1909年（44歳）、5人のリトミックの生徒を連れてオーストリアとドイツを実演巡回し、そ

の後、スウェーデン (1911)、イギリス (1912 / ジュネーヴの子どもたちを連れて巡回)、オーストリア (1914)、ハンガリー (1914)、ベルギー (1920)、イタリア (1925)、ポーランド (1927)、オランダ (1929)、スカンディナヴィア (1937) など精力的にリトミックのデモンストレーション (実演付き宣伝活動) を行い普及に努めた。しかし、リトミックの普及活動は決して平たんなものではなかった。

音楽学校の委員会から“ステップを踏むための”特殊講義を開く許可が得られなかったので、彼はやがてヴィクトリア・ホールについて、宗教改革記念館に稽古場を借りる。

(中略)「わたしがまるで悪いことでもしたかのように、憤慨している学者たちの集会に何度も出頭しなければならなかった。私の極悪な発明によって、新しいポストの確立が危機に瀕していると、非難するのだ。委員長はわたしに、『われわれはここでこんな馬鹿げたことをしてもらいたくない』と書き送ってきた。そして、私の最初の実験教育が行われた後、委員会のひとりのメンバーが全員の前で、『ジャックさん、あなたは衰退期ローマの最も下らない演劇を蘇らせておられるのですぞ!』と叫ぶことになるのである。医者にはわたしの訓練が過度の疲労を呼び起こすといっって非難する。舞踊術の専門家は、跳躍の技術が欠けているという。音楽家たちは、不等拍が涵用されているといい、画家たちは、(後になって採用された) 黒い体操着に不満を示し、リトミックが色彩感覚を殺してしまうといっって非難する。

この無理解と抵抗によって、わたしが熱心に追及していたリトミックを学校教育に導入するという目的は実現不可能となっていた」。(註11)

ダルクローズ自ら、リトミック発案を“極悪な発明”と表現しているように、この画期的なメソッドは、当初は周囲の理解を得られなかったのである。しかし、欧州各国に出かけ、地道な実演巡回を行うことによって、徐々に協力者を得られていった。

1910年 (45歳)、ジュネーヴ音楽学校を辞職。

1911年 (46歳)、ドイツのヘレラウにジャック・ダルクローズ音楽院が設立され、10月に着任、リトミック教育はたちまち国際的に高名を馳せた。

1913年 (48歳)、イギリスにダルクローズ・リトミック・ロンドン学校が設立され、世界中にリトミック体系を広めることに大いに貢献していった。

1915年 (50歳) には、ジュネーヴにリトミック教育の養成校「ジャック＝ダルクローズ音楽院」が創設され、生徒数は1915年～1934年までに46カ国7353名になり、指導者も飛躍的に増えて、欧州を中心に全世界に広まった。

1922年 (57歳)、ダルクローズは視覚障がい者のためのリトミックにも目を向け、リトミックの体系が治療の方向にも拡大していった。

1926年 (61歳) ジャック＝ダルクローズ・スイス協会設立 (7月)、国際リトミック教育者協会 (U・I・P・D) が設立され (8月)、ダルクローズは名誉会長となる。

1931年 (66歳)、ダルクローズ協会が日本で結成され (7月 / 事務局は成城学園幼稚園に置かれ小林宗作が設立に参画)、日本国内でのリトミック教育が徐々に広がっていった。

1934年 (69歳)、リトミックがストックホルムのスウェーデン王立学院にて、正式に採用される。

晩年もリトミック普及に情熱を注いだが、1950年 (享年85) 7月1日ジュネーヴで没した。

1958年、ジュネーヴ州議会は、町の大通りの一つを「ジャック＝ダルクローズ通り」と命名した。

## 2. リトミックの日本への導入

日本へは、1906（明治39）年に初めて導入された。歌舞伎の二代目、市川左団次（1880－1940）がロンドンの俳優学校に留学した折、リトミックを学び日本に持ち帰った。リトミックを欧州で学び影響を受けた人は多く、新劇の小山内薫（1881－1928）、モダンダンスの石井漠（1886－1962）、舞踊家の伊藤道郎（1892－1961）、体操の天野蝶（1891－1979）年、作曲家の山田耕筰（1886－1965）、音楽教育家の小林宗作（1893－1963）などが草分け的存在である。

小山内薫は、1913（大正2）年にドイツ、ヘレラウのダルクローズ音楽院を訪問し、伊藤道郎は1914（大正3）年にこの音楽院に学び、山田耕筰は1910（明治43）年にドイツに留学した際、1912（明治45）年、ヘレラウでダルクローズ音楽院を訪問しリトミックに触発されて、帰国後、リトミックが土台となる“舞踊詩”<sup>（註12）</sup>を創作した。

山田耕筰は、「音に反応する身体の動きを通じ、体内に眠る能力を引出し、身体表現の新たな可能性」<sup>（註13）</sup>、「音楽と言葉と動きが一体化した総合芸術」<sup>（註14）</sup>、いわゆるリトミックに関心を持ち、帰国後（1913《大正元》）年、小山内薫、伊藤道郎や石井漠の協力を得て、演劇や舞踊の世界にも乗り出し、1910年代から1920年代にかけて“舞踊詩”を精力的に作曲した。

“舞踊詩”は、「彼と彼女」（1914～1916）、「若いパンとニンフ」（1915）、「鷹の井戸」（1915）、「青い焰」（1916）、「マグダラのマリア」（1916）、「野人創造」（1922）などがある。「彼と彼女」は、最初ピアノのためのポエムと呼ばれ、後に耕筰自身によって“舞踊詩”に分類された7つの掌編集である。「若いパンとニンフ」はピアノのためのポエムとして作曲され舞踊を伴うことを前提としている。「鷹の井戸」はアイルランドの文学者、W・B・イエーツの同名戯曲のための劇音楽として作曲、5つの歌からなり、伴奏楽器はピアノでもよいが、あるいはハープでも容易に可能なように作曲されている。「青い焰」はまず、小管弦楽のための“舞踊詩”のピアノ・スケッチとしてかかれ、のちにオーケストレーションも施された。「マグダラのマリア」は、舞踊詩劇で舞踊詩より時間的にも大規模でより劇的起伏に富んだ舞踊音楽としてメーテルリンクの同名戯曲に基づくピアノ・スケッチに仕立てた。「野人創造」は、ファゴットを欠いた管弦楽にテナー・サクソ、ピアノ、ハーモニウム、木魚、※タラコンの楽器編成で作曲された。この6作品は国内外で実演されている<sup>（註15）</sup>。 ※talacon（竹製の打楽器のようだが詳細は不明）

また、小林宗作は、1923（大正12）年、「欧州ではどのような教育を実践しているか」視察のため留学、新渡戸稲造（当時、ジュネーヴで国際連盟事務次官）の勧めもあり、パリのダルクローズ音楽学校に入学して1年余を直接ダルクローズに学んでいる。1930（昭和5）年、再びパリへ留学、再度ダルクローズに師事している。帰国後、成城学園の主事となり、幼稚園・小学校でリトミック教育を実践、のちに小林が開校したトモエ学園ではリトミック教育に力を入れている。トモエ学園の校章は、「子どもの身心両面の発達と調和を願う」<sup>（註16）</sup>小林の教育理念であり、前掲のダルクローズのトレード・マークと同じものである。

また、1949（昭和24）年から国立音楽大学で教鞭を執り後進の指導に当たっている。

小林は「幼児の生活は未分化で全体的活動の時代であるからリズム訓練も所詮リトミックの如く分析されたリズムの姿で取り扱われてはならない。もっと幼児の生活や遊戯の中で工夫して指導がなされるべきだ」<sup>（註17）</sup>とし、リトミックが日常の保育と切り離されたものであっては

ならないと教説している。

トモエ学園のリトミック授業は、在校生だった後年の女優・黒柳徹子自叙伝『窓際のトットちゃん』<sup>(註18)</sup>に詳しい。

天野蝶は、1931(昭和6)年、リトミックの修業のためパリのダルクローズ音楽学校へ留学した。1年余の滞在でダルクローズから直接リトミックを学び、帰国後は天野式リトミックを提唱、幼児教育現場や中学校・高校・大学でリトミック指導に携わった。天野は、ダルクローズの指導手法であるピアノ即興奏法が一般の指導者には難しいと考え、ピアノの代りに天野式リズム太鼓を用いた。

教育者としてリトミックに携わった天野と小林は、リトミック教育を根幹に置いていることでは一致しているが、天野は体育教師、小林は音楽教師であったため指導方法や方向性は異なっていた。天野は体育ダンスから出発し体育と音楽の融合にリトミックを見出し、発展的に作り上げていったのである。<sup>(註19)</sup>

日本におけるリトミック導入の初期は、音楽教育が先行していたのではなく、むしろ歌舞伎、新劇、モダンダンス、舞踊などさまざまな芸術分野で注目され、表現者の基礎的学習として導入されている。

## II. リトミックの実践

沖縄キリスト教短期大学保育科におけるリトミックの授業と社会福祉法人さうんど保育園(沖縄県西原町在)における保育のリトミック表現遊びの実践を紹介する。

### 1. 沖縄キリスト教短期大学保育科におけるリトミックの実践例

沖縄キリスト教短期大学保育科の「音楽表現指導法」において筆者はリトミックを実践、曲のイメージによる身体創作表現をカリキュラム化しているが、「1分間の身体即興表現」を題材にしたImprovisation(即興)の課題を設定している。

■実際の授業事例を紹介しよう。

【表1】のシラバスの通り、「イメージ表現による身体即興創作」の授業展開例である。

(「音楽表現指導法」2016年10月26日《水》13:00～14:30)

【表1】授業計画(沖縄キリスト教短期大学2016年度音楽表現指導法シラバス)担当:大山

第1回:オリエンテーション
第2回:リトミック教育について(DVD学習/リトミック発祥地におけるリトミック教育)
第3回:拍の理解と基礎リズムのリズム打ちとステップ(歩く・走る・スキップ)
第4回:リズムパターンとフレージング
第5回:リズムパターンとポリリズム
第6回:幼児曲を題材にした創作表現
第7回: <u>イメージによる身体表現</u>
第8回:拍子感とアナクルーシスについて
第9回:3拍子(簡易楽器や教具を使って)
第10回:教材研究①
(手遊び歌、童謡を題材にして)

第11回：「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」における『表現』領域について ○「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」
第12回：教材研究② (テーマに即した題材に基づいて)
第13回：ボディー・パーカッション
第14回：教材研究③ (合奏表現の発表)
第15回：まとめ
第16回：実技テスト
※手遊び、歌遊び、身体創作表現等は、その都度、課題に即した教材内容で行う。○は追記

授業の主旨は次の通りである

- (1) ねらい：1分間の既成曲を題材に、イメージに基づいて音楽構成を組み立て、身体を通して創造的に表現する力を育てる。
- (2) コンセプト：1分間の既成曲を即興的に創作表現するImprovisationに力点を置いている。
- (3) 場所と人数：沖縄キリスト教短期大学リズム室・27名
- (4) 題材：1分間の既成曲(リムスキー・コルサコフ作曲「熊蜂の飛行」)<sup>(註20)</sup>
- (5) 楽器編成と演奏者：声楽(BOBBY Mc FERRIN HUSH)  
チェロ(YO-YO MA)  
原曲は管弦楽であるが、教材は声楽とチェロに編曲されたものを活用した。
- (6) 使用CD：Sony Music Entertainment Inc. 1992 (Recording, New York, August 22-25, 1991) 演奏時間：1' 09
- (7) 原曲：オペラ「皇帝サルタンの物語」の第三幕間奏曲に「熊蜂の飛行」がある。原曲の楽器編成は管弦楽。【楽譜1】<sup>(註21)</sup>  
授業の教材はチェロと声楽に編曲されたものを活用。上記(5)(6)の通り。
- (8) 創作編成：2グループに分かれ(1グループ13~14名)、イメージに即した身体創作を組み立てる。
- (9) テーマを設定しストーリー性を持たせる。
- (10) 曲を聴いてイメージし発想を大切に作る。
- (11) 音楽と身体即興表現がマッチするよう何度か合わせ仕上げていく。
- (12) 各グループの創作表現を発表する。
- (13) 各グループのパフォーマンスを学生同士で講評し、相互に表現力を高め合う。
- (14) 発表シートを提出する。(内容：①グループの発表者名簿 ②表現構成の内容 ③他者評価(他グループ評価)と自己評価(自分達グループ)を記述。

授業の流れは次の通りである。

- ① CD「熊蜂の飛行」を数回鑑賞し(曲名は知らせない)、曲のイメージについて学生に質問する。(以下は学生の回答)

- ・ 何かに追っかけられている。
  - ・ 怖い。苦しみ。不気味。暗い。
  - ・ 蠅が飛んでいる。
  - ・ 蜂が飛んでいる。
  - ・ トムとジェリー。(猫と鼠をモデルにしたアメリカのアニメーション映画)
  - ・ 台風が吹き荒れている。
  - ・ 低音から高音に音が転がっている部分がある。
- ② CDを鑑賞し演奏の楽器編成について質問したが、正解の「人の声」は出たものの、チェロは出なかった。(以下は学生の回答)
- ・ バイオリン ・ コントラバス ・ フルート ・ クラリネット ・ オーボエ ・ パーカッション ・ 人の声
- ③ 2グループに分かれリーダーを決め、どのように音楽をイメージし身体即興表現するか、音楽構成を組み立てる。(30分間)
- ④ 草案ができると音楽と合わせ、リーダーが意見をまとめながら整えていく。何度も音合わせして仕上げていく。
- ⑤ 1グループずつ発表する。
- ⑥ 各グループのパフォーマンスを学生同士で講評する

【楽譜1】「熊蜂の飛行」原曲は管弦楽/全曲114小節(下記楽譜は1小節～30小節の部分)  
授業ではチェロと声楽に編曲された楽曲を活用。上記(5)(6)(7)の通り。

**THE FLIGHT OF THE BUMBLE-BEE**  
from the Opera "Tsar Saltan"

Vivace.  $\text{♩} = 144$ . Rimsky Korsakov  
くまげらの飛行





【写真1】1グループの発表（テーマ：鬼と市民の戦い）

【表2】1グループ発表シート（提出シートを筆者が転記・学生の視点の良さは下線した）

- ① 名簿は割愛
- ② 表現構想：人々が平和に暮らしている町に突然鬼が現れる。人々は鬼に捕まり平伏すが、勇者が立ち上がり最終的には市民が勝利する、というパッピーエンドな物語を創作した。この曲のイメージが「追いかっこ」や「逃げる」「恐怖」だったので、逃げる動きを中心とした。  
創作で意識したことは、慌ただしい雰囲気を作り出すこと、見て楽しめるようにすることでした。
- ③ 自己評価：私たちのグループは、曲から感じ取れるのはどういう雰囲気か考え、「逃げる」「恐怖」をイメージし、物語風に創った。約1分間という短い曲の中で初めから終わりまで物語を創ること、それが見るだけで相手に伝わるようにすることが難しかった。ギリギリまで時間を使って完成したが、物語として成り立っていたと思う。勇者が立ち上がるシーンに、皆が床を叩いて音を出し、雰囲気を出していたところがとても良かったが、躍動感や緊迫感、場面にあった雰囲気が出せていたと思う。それが観る人に伝わっていたらいいなと思う。最初は無理な課題だと思ったが、皆で協力して創り出した一つの作品に満足した。
- ④ 他者評価：私たちと系統の違いを感じた。同じ曲でもグループの個性が出ていて面白かった。最初に登場してくるところでも、右から左から一人ひとり出てくるという工夫がとてもよかった。全体的にまとまりがあって、皆で協力している感が伝わってくる。後ろの二人が旗を振る事で、躍動感や強さが見られた。教室にある道具をとっさに使い見立てるという保育士に必要な技術もよかった。テーマ設定もあり見ていて動きたくなる面白さだった。



【写真2】2グループの発表 (テーマ: 暴走族と交通安全)

【表3】2グループ発表シート (提出シートを筆者が転記・学生の視点の良さは下線した)

- |  |
|--|
| <p>① 名簿は割愛</p> <p>② 表現構想: 音のイメージが「騒がしい」「怖い」「暴走している」感じ。<br/>58号線をリーダーのKさんを先頭に暴走する話です。<br/>Kさんが最初に暴走していて、次々と合流していき、三角の形になって走りながら、リーダーの走り方を真似します。ウィリィーをしたり、旗を持った暴走族もいます。最後にはみんなで同じ方向を向いて信号が赤なので交通安全の意識を持ちオートバイを止めます。<u>工夫したところは旗を作ったところ(棒にタオルを巻いた)、登場の仕方、最後のポーズです。</u></p> <p>③ 自己評価: 良い点は、旗に見立てて道具を使ったところ、悪い点は、リーダーのまねをするときに、笑ったりして<u>少し恥ずかしがりました。</u>最後の終わりの挨拶を忘れてしまいました。</p> <p>④ 他者評価: <u>音楽を上手く表現できていた。(床を叩くところ)</u><br/>ストーリー性があり恥ずかしがらないでやっていて、しかも上手でした。<br/>一人ひとりが自分の役をこなして、一分間のストーリーができていた。まとまりがあった。</p> |
|--|

沖縄キリスト教短期大学保育科の学生による「1分間の身体即興表現」では、学生たちの曲からイメージする発想が自由で伸びやかであり、即興表現を創り上げていくプロセスは、グループのコミュニケーションの密度が濃い程、短時間で独創的に完成していく様子が窺えた。

また、他グループのパフォーマンスに対する講評では、互いの表現力を高め合っており、身体即興表現の教材研究に熱心に取り組む姿勢が見られた。

## 2. さうんど保育園におけるリトミック活動の実践例

さうんど保育園の保育目標は、「やさしく」「かしこく」「たくましく」で、「音楽活動を通して、心身ともに健やかな子どもの成長を育てる」という、リトミックの方針を掲げている。

■さうんど保育園4歳児、5歳児のリトミック活動を紹介する。

・リトミック指導 宮城茂光園長 ・4歳児クラス担当H保育士・5歳児クラスM主任保育士（活動日：リトミック保育10月31日《月》4歳児／さくら組19名13：00～13：20、5歳児／ひまわり組17名13：20～13：40）

当日の午前保育は、園児たち（2歳児から5歳児）が、ハローウィンで仮装し地域周辺をパレード。

4歳児の活動内容は次の通りである。

- ① 歩く、走る、スキップをピアノのリズム音楽を聴いてステップし【写真3】、途中ピアノの音が止まるとステップを止める。ピアノの音の高低を聴き分けて、身体で表現する。【写真4】は低い音を聴き分けて、身体を小さく丸めて“石”を表現している場面である。それを変則的に繰り返す（即時反応）。宮城園長は即興的にストーリーを作り子どもたちに話し掛ける。園児たちはそのストーリーを聞きながら即興的に模倣動作する（即興的表現遊び）。4歳児担任のH保育士（以下H保育士と記述）は活動に消極的な園児を促し一緒に表現活動をしている。

宮城園長：おはようございます。今日はお天気がいいのでお散歩に出かけましょう。

お出かけ前に、歯磨きして顔を洗いましょうね。

園児：ハイ。シュツ、シュツ、シュツ

宮城園長：お散歩はどこがいい？

園児：イルカ公園に行きたい！

宮城園長：それでは、出かけますよ。ピアノを聴いて歩いてみましょう。（ピアノのリズムを聴き取り、ステップする）♪、♪、スキップなど

宮城園長：信号は何色ですか？

園児：あか！

宮城園長：止まりましょう（ピアノを止める）。子ども達もステップを止める。

園児：青になったあ！

宮城園長：さあ歩きましょう（ピアノで♪を弾く）。子ども達はピアノのリズムに合わせてステップする。

宮城園長：公園につきました。何して遊ぼうか？

園児：ブランコ！

宮城園長：じゃあ二人でお友達になってブランコして遊びましょう（二分音符のリズムをピアノで弾く）

園児：二人組になって前後にスウイングする。【写真5】

- ② 園児が好きなポーズを即興的に表現する。

宮城園長：さあ、好きなものになってみようか。（ピアノのステップリズムを聴き、グリッサンドが鳴るとポーズをとる）

園児：（さまざまなポーズをとっている）

宮城園長：写真を撮るので止まってみようか…… はい、ポーズ！

H保育士：すてきだね。なんだろう？ かつこいいね。なあに？（問いかける）

園児 A：ぶたさん！ 【写真6】

園児 B：ゴリラさん 【同上】

園児 C：ウサギさん 【同上】

宮城園長：たくさん遊びましたね。さあ、かえりましょうか。

園児：ピアノのリズムを聴き分けながら、歩く、走る、スキップしておうちにかえる。

4歳児クラスはお昼寝の時間に入る。

H保育士（担任）が、「お昼寝の時間ですよ」と声を掛けると園児達は他の保育室に移動する。5歳児と入れ替わる（リトミック活動は4歳児クラスの教室で行う）

5歳児の活動内容は次の通りである。

① 歩く、走る、スキップをピアノのリズムを聴き分けてステップし、途中ピアノの音が止まるとステップを止め静止する。また、音の強弱（f、P）を聴き分けて、音の強弱を身体で表現する。それを変則的に繰り返す。（即時反応）

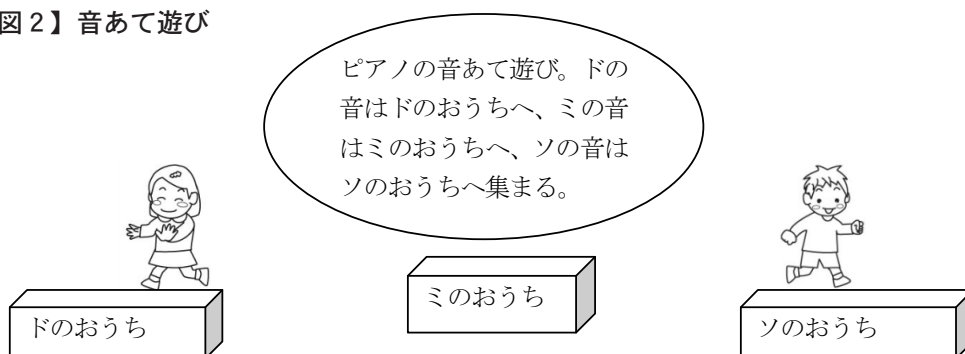
② 宮城園長が即興的にストーリーを作り子どもたちに話し掛ける。園児たちはそのストーリーを聞きながら即興的に模倣動作する。（即興的表現遊び）

主任のM保育士は、「今度は小さくて、優しい音だよ～」とわかりやすく音の表情を声掛けしながら園児たちの表現意欲を促している。

③ ド、ミ、ソの音を聴き分ける音あて遊び。【図2】

園児たちはピアノに合わせてスキップし、ピアノでドドドーの音が聴こえてきたら $\square$ のおうちに集まり、ミミミーの音が聴こえてきたら $\square$ のおうちへ、ソソソーの音が聴こえてきたら $\square$ のおうちに集まるという音あて遊びをしている。ドは「おひざ」、ミは「おへそ」、ソは「肩」とそれぞれ決まった部位をたたきながら歌っている（ボディ・ソルフェージュ）。【写真7】

【図2】音あて遊び



④ 園児が好きなポーズを即興的に表現する。

園長がピアノで弾く、歩く（♪）、走る（♪）、スキップのリズムを聴き分け、ステップする。ピアノのグリッサンドが鳴ったら、止まって好きなポーズをとる。

園児：(さまざまなポーズをとっている)

宮城園長：写真を撮るので止まってみようか。…… はい、ポーズ！

M保育士：かっこいいね。なあに？(問いかける)

園児 A：「I字バランス！」【写真8】

園児 B：「こわれたテーブル！」【同上】

園児 C：「トンネルだよ～」【写真9】

園児 D：「イス～」【写真10】

宮城園長：さあ、リトミック遊びは終わりです。お昼寝の支度をしましょう。



【写真3】4歳児  
ピアノのリズムに合わせて、歩く、走る、スキップをステップしている

【写真4】4歳児  
ピアノの音の高低を聴き分けて、低い音は身体を小さく丸めて“石”を表現している。



【写真5】4歳児  
公園でブランコ遊び。友だちとスイングして模倣動作。

【写真6】 5歳児

ピアノのグリッサンドが鳴ったら好きなポーズになる表現遊び。  
「ぶたさん！」(右)、「ゴリラさん！」(中)、「ウサギさん！」(左)



【写真7】 5歳児

ピアノの音あて遊び。ド、ミ、ソ  
なんの音かな？音のおうちはどこかな？  
ソ、ソ、ソー 肩をたたきながらソを歌い、ボディ・ソ  
ルフェージュをしている。

【写真8】 5歳児

かっこいい！ なんのポーズ？  
「I字バランス！」(手前)  
「こわれたテーブル！」(奥)



【写真9】 5歳児  
なんのポーズかな？  
「トンネルだよ～」  
すごいね！

【写真10】5歳児  
すてきね。なんのポーズか  
な？ 「イス～」  
あら、すわりたくなるね。

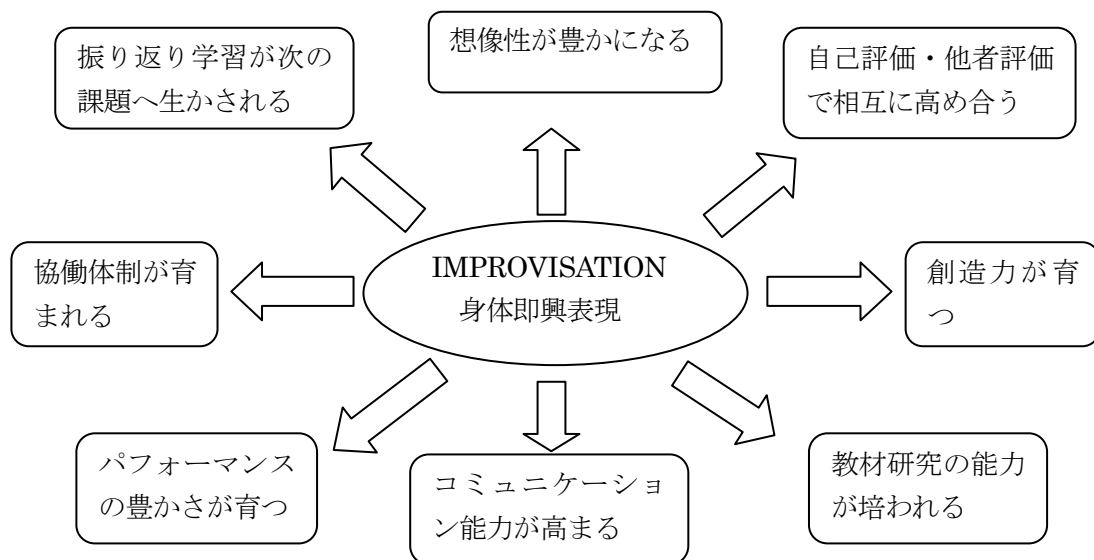


さうんど保育園の4歳児、5歳児の身体を通した表現遊びは、即興的発想が独創的で一人ひとり個性豊かに表現しており、音のリズムや音の高低、音の強弱を聴き分け身体で表現していた。また、好きなポーズを表現したり、友だちとパートナーを組み、シーソーの模倣動作を楽しんでいた。

### Ⅲ. まとめ

本論文は、リトミックを「身体即興表現」からアプローチしてきたが、実践例を通してリトミックの身体即興表現の教育的意義について考察する。

#### 1. 保育科における「身体的即興表現」の実践



【図3】リトミックの教育的意義

前掲の保育科学生が提出した「発表シート」から読み取れるように、Improvisation（即興）の身体即興表現について、学生のコメントからキーワードをまとめてみよう。

### (1) 表現構想について

曲からイメージした発想を大切にテーマを設定している。1グループは「鬼と市民との戦い」、2グループは「暴走族と交通安全」をテーマにしている。

鑑賞した曲のイメージを大切に、「追いかけて」「逃げる」「恐怖」を素材に、ストーリー性を持たせて組み立てている。これは、曲のイメージを自由に膨らませることによって、想像性の豊かさや創造力が育つキーポイントになる。

創作のプロセスでグループの意見を出し合い話し合うことによって、協働体制やお互いのコミュニケーション能力を高めている。曲をどのように感じ、表現していくか、自分たちの発想力をどれだけ身体表現に生かせるか、教材研究能力が培われる。

### (2) パフォーマンス能力

発表時は、視線や動きのタイミング、動作のダイナミクスなど観る人にどれだけ訴えかけられるかを工夫することによりパフォーマンスの豊かさにつながっていく。学生たちも「相手に（観る人に）伝わるように表現することが難しかった」と記述しているようにメッセージ性を伝える課題も意識していることがわかる。

### (3) 学習の振り返り

他者評価（他グループ）のパフォーマンスを講評することによって、お互いの表現力を高め合い、自己評価（自分たちグループ）によって振り返り学習ができ、次への課題に生かされる、というサイクルが生まれ学習成果がより向上してくる。

「最初は無理な課題と思ったが、皆で協力して創り出した一つの作品に満足した」の記述のように、身体即興表現へのモチベーションの高さは振り返り学習の成果ともいえる。

また、2グループのパフォーマンスについて、1グループの他者評価に「教室にあった棒にタオルを巻き、旗を製作したとっさの発想は『保育士に必要な技術』」と記述しているように、彼らは単なる音楽の授業の場面だけではなく、「保育士」を目指し将来像と重ね合わせていることがわかる。ただ、1グループの「鬼と市民の戦い」、2グループの「暴走族と交通安全」は、曲から受けたイメージの“音”のみではなく、音楽的なイメージについてもっと掘り下げて考える方向に導く必要性はあっただろう。

## 2. 保育園における身体表現について

さうんど保育園では、リトミック活動が活発であり、月曜日から金曜日まで曜日ごとに1歳児から5歳まで毎日実践している。指導は宮城園長で、各クラスの担任保育士が子どもと一緒に活動している。

リトミックのカリキュラム内容は、年齢ごとに示されているが、2歳児、3歳児は「リズム運動への導入」「模倣動作を通して身体で表現することを味わい、豊かな創造力を養う」「リズムの言葉遊びを楽しむ」「身体活動を通してリズム感を育てる」などである。4歳児は、「基礎リズムを体験する」「音楽のダイナミクス（強弱）を体験する」「自由表現の喜び、楽しさを味わい、創造力を伸ばす」を掲げている。5歳児は、「基礎リズムとリズムパターンの獲得」「より機敏な動作と即時反応」「歌唱や合奏、身体表現を通して歌ったり演奏する楽しさを味わい、表現する喜びを持たせる」などがあり、段階的に音楽活動を経験させている。

ここで、10月31日の4歳児・5歳児のデイリープログラムを見てみよう。



■ 4 歳児クラス（さくら組）の活動

7：15～9：40	開園 自由保育（合同保育）、片づけ
9：40～10：00	朝の集い
	① 朝の歌：「おはようの歌」（作詞：田中忠正 作曲：河村光陽） 「夜が明けた」（フランス民謡）
	② 全体の歌：「運動会の歌」（作詞：小林久美 作曲：峯 陽）
	③ 今月の歌：「山の音楽家」（作詞：水田詩仙 曲：ドイツ民謡） 「さんまのサンバ」（作詞・作曲 小沢かづと） 手遊び歌 CD：キングレコード
10：00～11：30	ハロウィンパレード
11：30～12：30	帰園および昼食
13：00～13：20	リトミック
13：20～15：00	午睡
15：00～16：00	おやつ
16：00～16：30	お帰りの会・自由遊び
16：30～	降園支度および降園

■ 5 歳児クラス（ひまわり）の活動

7：15～9：40	開園 自由保育（合同保育）、片づけ
9：40～10：00	朝の活動（1）歌唱活動
	① 朝の歌：「夜が明けた」（フランス民謡） 「おはようの歌」（作詞：田中忠正 作曲：河村光陽）
	② 全体の歌：「運動会の歌」（作詞：小林久美 作曲：峯 陽）
	③ 今月の歌：「歌えバンバン」（作詞：阪田寛夫 作曲：山本直純） 「堂小屋屋敷ぬたんめーさい」（沖縄わらべ歌）
10：00～11：30	ハロウィンパレード
11：30～12：30	帰園および昼食
13：20～13：40	リトミック
13：40～15：00	午睡
15：00～16：00	おやつ
16：00～16：30	お帰りの会・自由遊び
16：30～	降園支度および降園

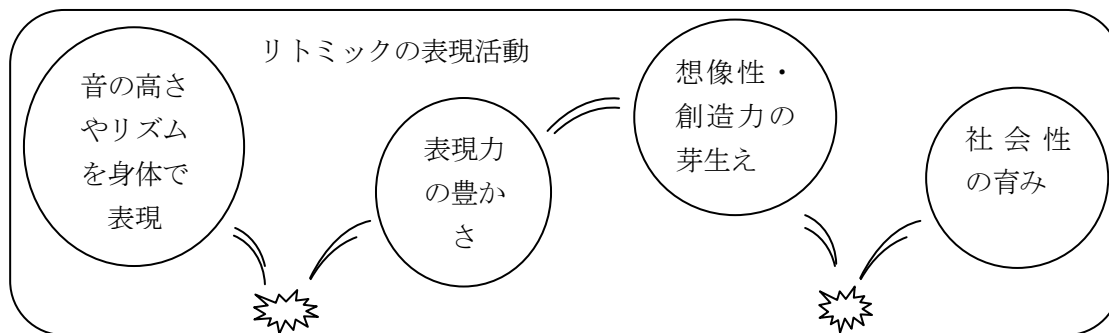
10月31日のリトミック活動についてまとめてみよう。

リトミックの表現活動では、ピアノのリズムを聴いて歩く、走る、スキップ、止まるなど身体を通して音楽表現をしたり、ド、ミ、ソの音の高さを聴き分けて音あて遊びを楽しむなど、音楽の基礎的能力を育てている。ピアノのリズムに合わせて、ブランコの模倣動作を友達とスィングしたり話しかけたりして楽しんでおり、友だち同士で協力するという社会性も育まれている。

さうんど保育園は、保育士の言葉掛けによって即興的にポーズをパフォーマンスするといっ

た創造的活動は日常の保育の中で行っており、想像性や創造力の芽生えを育てているといえるだろう。

【図4】のように、リトミックの表現活動を行うことによって、想像性や創造力の芽生えを育み、音高や音の強弱、リズムを聴き分ける音楽的基礎能力や、即興的にポーズを表現するという活動は、表現力の豊かさを育てているといえよう。



【図4】身体表現活動の教育的意義

### 3. リトミック教育の方向性

「The aim of eurhythmics is to enable pupils at the end of their course not to say, “I KNOW”, but to say, “I HAVE EXPERIENCED”. Thus creating in them the desire to express themselves. (註22)

ダルクローズは、「リトミック教育の目的は、生徒たちにその学習を終えたとき、『私は知っているのではなく、私は感じ取ったと言わしめることである』」(註23)と述べているように、セオリーやスキルを獲得することが目的ではなく、音楽を感じる豊かな感性を育てることが重要であると説いている。

「How do the students feel the music? How do the students understand the music? He tried to answer these questions」。(註24)

ダルクローズがジュネーヴ音楽学校で教鞭を執っていた時、「学生が音楽を感じとるための指導方法はないだろうか」、「学生が音楽（の生命）を理解する方法はないものだろうか」と、自問自答していた。学生たちに音楽の生命を感じさせるためにはどうしたらよいか、その方法論を追及して、ついにEURHYTHMICSを創案したのである。

リトミックの誕生は決して平坦な道のりではなかった。「極悪な発見」とダルクローズ自身が表現しているように、草案の当初は、周囲から非難を受け理解が得られなかった。欧州を中心に、地道なリトミックのデモンストレーションを実践することによって、世界に徐々に広まっていった。

ジュネーヴから誕生して世界に広まって約115年、「音楽の生命」を教えるための方法論を追求したダルクローズは、「リトミック教育の生命」を紡ぎ、今や後世に継承されている。

リトミック教育は、幼児教育現場や学校教育の実践はもとより、あらゆる表現者の基礎として、また、乳幼児からお年寄りまでゼネレーションを超えて習得できる生涯学習といえるのではないだろうか。

しかし、ダルクローズの目指した「リトミック教育」が、果たして今日に生かしているだろうか。リトミック・メソッドの教育的意義が十分に理解されているだろうか。技術面だけ先行

していないだろうか。過剰な商業主義や英才教育の位置づけのみが強調されて、本来のリトミック教育が理解されていないのではだろうか、と……。

画一的で一律化した教育ではなく発想が伸びやかな、人間の個性や感性の豊かさを育てるためのリトミック教育の眼目を忘れず、リトミックの教育的意義を今一度確認し、今後のリトミック実践へ繋げる必要があるだろう。

【謝辞】 山田耕筰令嬢、山田浩子様より「山田耕筰の遺産『よみがえる舞踊詩』」（東京文化会館大ホール、2004年7月3日）演奏会プログラム、及びCD「山田耕筰 舞踊詩」をご恵贈いただき誠に有難うございました。

また、社会福祉法人さうんど保育園において、4歳児・5歳児のリトミック活動のフィールドワークにご協力いただき、宮城茂光園長をはじめ保育士の皆様に大変お世話になりました。心から、感謝申し上げます。

【註】

- 註1 Lois Choksy, Robert M. Abramson, Avon Gillespie, and David Woods, *Teaching Music in Twentieth Century*, Prentice - Hall, 1986, p.29
- 註2 Ibid.p.30
- 註3 大山伸子「リトミック理論における楽曲分析と身体表現－琉球音楽との接点に触れながら－」沖縄県立芸術大学紀要第5号、1997、p.125
- 註4 同書、p.127
- 註5 同書、p.142～144「The Definition of Eurhythmics」
- 註6 フランク・マルタン、他著／板野平訳『作曲家・リトミック創始者 エミール・ジャック＝ダルクローズ』全音楽譜出版社、1977、p.3「少年（ダルクローズ6歳）は、音楽の手ほどきを受ける。彼は（大変醜い、老嬢）のところでピアノのレッスンを受ける」とあり、ダルクローズが晩年、スイス・ロマンド新聞に発表した回想録からのものである。
- 註7 ガブリエル・ユルバン・フォーレ (Gabriel Urbain fauré) 1845～1924 フランスの作曲家・オルガン奏者・教育者。代表作に「ヴァイオリン・ソナタ第1番」や「3つの無言歌」などピアノ曲がある。1896年にはパリ音楽院の作曲法と対位法の教授となる。高弟に「ボレロ」を作曲したジョゼフ＝モーリス＝ラヴェルなどがいる。『音楽大事典4』平凡社、1991、p.2084～2093（大意）  
ダルクローズは1884年パリに渡り作曲法をフォーレに学んでいるが、フォーレとダルクローズの師弟関係について詳細は明らかではない。
- 註8 ヨーゼフ・アントン・ブルックナー (Josef Anton Bruckner) 1824～1896 オーストリアの作曲家・オルガン奏者。交響曲と宗教音楽の大家として知られている。交響曲は0番から9番（未完成）に加えて、交響曲へ短調は通し番号を与えなかった。宗教曲に「ミサ曲第1番二短調」「テ・デウム」などがある。『音楽大事典4』平凡社、1991、p.2179～2182（大意）  
ダルクローズは1887年から2年間ウィーンに渡り、作曲法をブルックナーに師事してい

るが、ブルックナーの作風がダルクローズの作風やリトミック教育にどのように影響を及ぼしたかはわかっていない。

- 註9 註6と同書、p.302～303
- 註10 註3と同書、p.142～143「The Definition of Eurhythmics」
- 註11 註6と同書、p.67～68
- 註12 山田耕筰(1886～1965)作曲家・指揮者 代表作に「からたちの花」(作詞:北原白秋1925)、「赤とんぼ」(作詞:三木露風1927)がある。実業家・岩崎小弥太の援助で1910(明治43)年から1913(大正2)年までベルリンに留学、ヴォルフ K.L.Wolf に作曲の基礎を学んだ。1941(昭和16)年、新劇の小山内薫と組んで「新劇場」を創立、耕筰自身はモダンダンスの石井漠を指導して“舞踊詩”を発表した。“舞踊詩”には「彼と彼女」(1914)、「野人創造」(1922)などがある。『音楽大事典5』平凡社、1992、p.2619～2621(大意)
- 註13 「山田耕筰の遺産 よみがえる舞踊詩」(東京文化会館大ホール、2004年7月3日)演奏会プログラム、p.18(「80年の『眠り』を経て甦る山田耕筰の舞踊詩～総合芸術への夢が現実に…」)池田卓夫
- 註14 註13に同じ、p.10(「曲目をめぐる」)片山杜秀
- 註15 註14に同じ、p.10～16(大意)
- 註16 黒柳徹子著『窓際のトットちゃん』講談社、1981、p.111  
註16と同書、講談社文庫版、2015、p.138～139
- 註17 小林恵子著「ダルクローズ・リトミックの日本への導入」日本ジャック＝ダルクローズ協会(F.J.E.R日本支部)、p.32
- 註18 註16と同書、p.107～112  
註16と同書、同文庫版、p.133～140
- 註19 註17と同書、p.33
- 註20 作品解説「熊蜂の飛行」ニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844～1908)ロシアの作曲家のオペラ作品で「皇帝サルタンの物語」第三幕の間奏曲。アレクサンドル・プーシキンの原作に基づきペルスキーが台本化したものを、コルサコフが1889～1890年に作曲した。サンタル皇帝の三女が二人の姉たちに妬まれ、主人公のグラヴィドン王子とともに島に流されるが、王子が魔法の力によって熊蜂に襲われた白鳥を助け、白鳥から人間の姿に戻った王女と結ばれるという話。「熊蜂の飛行」は、恐ろしい闇の島に流された王子が、海の遙か向こうから飛来した熊蜂の群れに襲われていた白鳥を救い出す第三幕の場面で使われ、白鳥の周りを飛びまわる熊蜂の羽音を模した表現である。
- 註21 「熊蜂の飛行」原曲の楽器編成はフルート、オーボエ、コーラングレ、クラリネット、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、チューバ、ティンパニ、シンバル、バイオリン、ビオラ、チェロ、コントラバスの管弦楽(全曲114小節)。  
スコア『皇帝サルタンの物語』日本楽譜出版社、p.1～8
- 註22 註3と同書、p.142～143「The Definition of Eurhythmics」
- 註23 註6と同書、p.320
- 註24 註3と同書、p.142「The Definition of Eurhythmics」

【楽譜 1】 リムスキー・コルサコフ作曲のオペラ「皇帝サルタンの物語」第三幕の間奏曲「熊蜂の飛行」(The Flight of the Bumble Bee) スコア、日本楽譜出版社、p.1～2

【図 1】 大山伸子「リトミック理論における楽曲分析と身体表現－琉球音楽との接点に触れながら－」沖縄県立芸術大学紀要 第5号、1997、p.127

【写真】 筆者撮影（撮影は保育科学生及び、保育園長の許可済）

写真1～2 沖縄キリスト教短期大学保育科「音楽表現指導法」授業(2016年10月25日)

写真3～5 社会福祉法人さうんど保育園「リトミック表現遊び」4歳児(2016年10月31日)

写真6～10 社会福祉法人さうんど保育園「リトミック表現遊び」5歳児(2016年10月31日)

【録音】 筆者（録音は保育園長の許可済）

社会福祉法人さうんど保育園「リトミック表現遊び」4歳児・5歳児

(Re.2016年10月31日) 13:00～13:40

【表 1】 沖縄キリスト教短期大学「2016年 講義要項」p.160

【表 2】 沖縄キリスト教短期大学保育科「音楽表現指導法」授業(2016年10月25日)

1 グループ発表シート

【表 3】 沖縄キリスト教短期大学保育科「音楽表現指導法」授業(2016年10月25日)

2 グループ発表シート

#### 【参考文献】

- 1 大山伸子「リトミック理論における楽曲分析と身体表現－琉球音楽との接点に触れながら－」沖縄県立芸術大学紀要第5号、1997、p.125～146
- 2 大山伸子「リトミックの理論と実践」国内・国外派遣研究員研究報告書第6号、沖縄人材育成財団発行、1997、p.199～226
- 3 フランク・マルタン他共著／板野平訳『エミール・ジャック＝ダルクローズ』、全音楽譜出版社1977
- 4 ヒーザー・ジェル著／板野平、鈴木敏朗訳『子どものための音楽と動き』全音楽譜出版社、昭和48(1973)
- 5 Emil Jaques=Dalcroze, *Rhythm, Music and Education*, The Knickerbocker Press,1921
- 6 エミール・ジャック＝ダルクローズ著／板野平監修／山本昌男訳『リトミック論文集 リズムと音楽と教育』全音楽譜出版社、2016
- 7 エミール・ジャック＝ダルクローズ著／河口道朗訳『音楽と人間』開成出版、2011
- 8 板野晴子著『日本の音楽教育へのリトミック導入の経緯－小林宗作、天野蝶、板野平の関わりを中心に－』風間書房、2015
- 9 板野晴子著『日本におけるリトミックの黎明期－日本のリズム教育へリトミックが及ぼした影響－』ななみ書房、2016
- 10 小林恵子著「ダルクローズ・リトミックの日本への導入」日本ジャック・ダルクローズ協会(F.J.E.R日本支部)、p.1～37

- 11 エリザベス・パンドゥレスパー著/石丸由理訳『リトミック教育のための原理と指針 ダルクローズのリトミック』ドレミ楽譜出版社、2012
- 12 マティス・リュシィ著/板野平訳『音楽表現の教則本 近代音楽におけるアナークルーズ』全音楽譜出版社、昭和54 (1979) 年
- 13 「山田耕筰の遺産 よみがえる舞踊詩」(東京文化会館大ホール、2004) 演奏会プログラム
- 14 CD「山田耕筰 舞踊詩」コロムビアミュージックエンタティメント株式会社、2004
- 15 Score / RIMSKY KORSAKOV 『The Flight of the Bumble Bee』(熊蜂の飛行)、日本楽譜出版社、p.1～8
- 16 「さうんど保育園しおり4歳児」平成28 (2016) 年度版
- 17 「さうんど保育園しおり5歳児」平成28 (2016) 年度版
- 18 「さうんど保育園・保育課程年間計画表」平成28 (2016) 年度版
- 19 「さうんど保育園・園だより」平成28 (2016) 年9月～10月版